

## 兵庫県将来構想研究会 第14回会議 議事録

1 日 時：令和2年12月21日（月）18時～20時

2 場 所：県庁2号館2階参与員室

3 出席者

委 員：阿部委員、石川委員、大平委員、織田澤委員、加藤座長、笹嶋委員、  
永田委員、中塚委員、服部委員

県 側：金澤副知事、水埜政策創生部長、池田計画監、守本ビジョン局長、  
木南ビジョン課長

4 内容

### （1）金澤副知事挨拶

大変お忙しい中、お集まりいただき感謝。私はいつも出席できているわけではないが、これまで1年3か月、13回にわたって議論を重ねていただいた皆様の尽力に改めてお礼を申し上げる。

今年は最後の最後までコロナに悩まされながら終わりそうな雰囲気である。我々にとって非常にしんどい話ではあったのだが、一方で、ビジョンの視点からすると、コロナで強い変革が、ポストコロナ社会のいろいろな姿をある程度実験的に先取りするような部分があった。ある意味で、次に生かすことのできる一つの経験ではないかと思っている。ビジョンの議論をするときに、ポストコロナ社会のあり方として見えつつあるものを中に入れることができる、そういう生かしようがあると思っている。

なにしろ30年先、2050年の話である。その遠い将来を予測しようとしても、どうせ当たるわけではない。むしろ、当たる、当たらないではなく、そういう社会にしたいという強い意志を持って、自らそれをこれから創り出していく、そういうことを、みんなが納得できるかどうか、合意できるかどうか、そういう説得力を持つビジョンになるかどうかのポイントになると思う。

私自身もビジョンを語る会ということで、各地でいろんなグループと話をしているが、グループによっていろんなタイプがあり、いろんなバリエーションがある。今直面している問題点ばかりが議論になって、これどうするんだ、これどうするんだと聞かれるケースもあるし、まさに自分たちの思う未来の姿を語ってくれるケースもある。

問題点からスタートするとなかなか未来の姿が見えてこないようなところがあって、どこかで問題点は問題点としてわかりながらも、それをジャンプして、こうあるべしというものを思い込む。そういうものが必要で、それが道標になり、人を引き付けるという気がしている。まさに委員の皆様には、そういう議論をしてきていただいたと認識している。

どちらといえば、かつちりした理論より感覚的なもの、常識とはちょっと違う尖った部分をあえてクローズアップして出していただいたところもあったと思う。この構想試案がこれからビジョンの議論をしていく上での重要なたたき台、ベースになっていくわけだが、今回の試案はあくまでそういう性格のものとして、あまりでこぼこを取らず、尖った部分をなくすことなくまとめていきたいと思っている。最後の最後の議論になるが、今日も活発な、遠慮のない発言を期待したい。どうかよろしく願います。

## (2) 事務局からの資料説明 (省略)

## (3) 意見交換

### ○委員

13 回にわたる議論をまとめ上げて、すごい資料を作られてさすがだなと思うわけだが、さすがだなと言っているだけが役割ではないので、せっかくなので厳しいご意見も含めて今日のご発言いただきたい。

この試案の使い方だが、これから進めていく新ビジョンの議論のたたき台、ベースとして使っていくものである。最初ぱっと見ると、方向性が書いてあるだけで、それに対してどういう仕組み、取組があるべきかといった点が抜けていると感じるのだが、その点は、この試案をベースに今後議論が展開されるということなので、そこはあえて書いていないという理解の上で今日のご意見をうかがいたい。

### ○委員

未来シナリオ1の個性の追求の参考情報で、日本の労働人口の49%をAI等で代替と書いてある。AI等での置き換えが困難なのは割と特殊な職業しかないという説明になっているが、そもそもAIをいろいろな現場に導入していく、いろいろな職業のデジタルトランスフォーメーションを進めていく、そういう仕事自体はAIには絶対できないことなので、そのところの仕事はこれから絶対増えると思う。要するに、ここに書いてあるような芸術、歴史学、哲学、神学など抽象的な概念を扱うとか、サービス志向性が求められるとか、割と特殊な職業だけがAIで置き換えできないのではない。そもそもいろんな作業の電子化自体がAIには無理なので、その辺りが今後増える仕事としてまずあると思う。

### ○委員

働くということはあらゆることに関わってくる。これに絡めてご発言がないか。

### ○金澤副知事

その部分のご指摘の通り。

そのページでもっと気になるのは、高い収入を得なくても不自由を感じない社会になるとある部分。これは格差が縮まって、平均的な収入さえあればOKということの意味していると思うのだが、誰もが自分らしさを追求する中で格差は縮まるというストーリー自体が本当に成り立っているのかどうか、これが本当に成り立つのなら、その点についてやはり特別な説明、こういうストーリーでという丁寧な説明が必要ではないかと感じた。

### ○委員

むしろ今議論されているのは、格差は拡大していく、あるいは現時点で格差は拡大しつつあるという議論で、AIという道具立てができるのと格差はより一層、何もしなければ極端な形で顕在化してくるというのがよく言われることだが、この辺りにはついてどうか。

### ○委員

私はAIの観点、技術革新の観点から、高い収入を得なくても不自由を感じない生活が可能になるということを描かれた背景には、シェアリングエコノミーがあると思っている。車を所有しなくても、スマートフォンにアプリを入れておいて、そのアプリでレンタカーを借りるようにすればよいとなるので、車を所有するコストが不要になる。その他のモノについても同じで、アプリケーションで他人と一緒にモノを共同所有するようになってくると、今までモノを所有したり保管したりすることでかかっていたコストがいらなくなるので、その点で収入が多少少なくても、同じような生活ができる社会になっていく。そういう議論がこの会でもあったはずだし、技術革新によって格差が縮まって不自由を感じない社会になるということの具体的な例だと思う。

### ○委員

その点は私も若干引っかかった。便利になるから多少収入が少なくても不自由を感じにくくなるということはあるとしても、人の価値観は非常に相対的なものであり、人は人との生活水準の差を常に意識しながら生きているもの。これを社会学では相対的剥奪感というのだが、その部分はなかなか消えない。どれだけ生活水準が上がって自由度が高まっても、人が自分よりいい暮らしをしていると、そこに格差を感じて生活満足度が低くなってしまう。そういうことがあるので、行政の文書の表現としては、この部分はちょっと強い感じがする。表現を少し考えた方がよいと思う。

### ○委員

今話を聞いていて、里山資本主義の本を思い出した。この本の著者はダメダメ日本論を言っている連中が日本をダメにすると言っている。日本の危機的状況を指摘するが、それは本当なのかと。例えば1人当たり所得は、かつて我々が豊かさを享受していた頃と何も変わっていない、外国の所得が上がっただけだと。それを危機的で日本はどんどんダメになっているというのがよいことなのかと言っている。

だが、日本の一人当たりGDPは今や世界の20位より下だ。1人当たり所得が以前と同じ額だとしても世界全体のGDPが上がれば、モノの価格はどんどん上がっていく。日本だけがクローズされたところで議論していても、世界で流通しているモノ、サービスが結局買えなくなってしまう。世界からどんどん取り残されていく。ということは、やはり日本が現実に貧しくなっているということなので、いかに生産性を上げるのかという議論にコミットしていかないと非常に危ない状況だと感じている。そういう議論もあるのではないかなと思う。

### ○委員

高い収入を得なくても不自由ない生活というのはわざわざ言わないでもよいとは思う。AIにとって代わられるような生産活動を機械に任せるときに、芸術や文化の面で日本は非常に厚みがあるので、そこを価値化してもっと豊かになることはできるように思う。やはり豊かになるということを前提に議論していくことが大事で、テクノロジーで便利になるという話は、両方目指してよい話だと思う。

## ○守本局長

私もずっと引っかかっている、書いてよいのか迷っていた部分だ。ここでは、時間にゆとりができて、今まで仕事や家事に追われていたのが少し緩んで、自分が本当にやりたいことができるようになるのではないかということを書いたかった。ワークライフバランスが進んでそうなると思うだけでよいのだが、あえて、それほど一所懸命に稼がなくてもいい社会ができるということもあるのではないかと、ということを書き加えている。研究会でも議論のあった限界費用ゼロ社会、単なる夢物語なのかもしれないが、あえて極端なことを言おうとしたら、あのような世界もあるのではないかと。ただ、シェアリングエコノミーしか理屈がないのに行政の文書に書くのかというのは思っていた。もし書くとしても、こういう社会があり得るといふ余程の理屈がないと書きにくい。検討させていただく。

## ○委員

冒頭金澤副知事が言われたように、こういう社会に行きたいという思いがここにあるのだとしたら、リフキンの議論は正統だと思うし、そっちの方に是非行ってほしいと思う。しかし一方で、リフキンが良い側だとすると、しんどい側では、極端に格差が大きくなってきて、一部の人が富を占有して、その他の人は奴隷労働のような状況、その格差は致し方ないことだとしても社会は分断を抱えざるを得ない。だが、お金を持った人が権力を持つので、この社会の仕組みを作り変えることはないだろう。すると、とんでもない社会になる可能性も一方ではある。その中で兵庫県が違う方向性を示すということは、県民としてはうれしいことだ。どのように表現されるかということではないか。

## ○金澤副知事

自治体としては言いにくいのだが、以前議論のあったベーシックインカム、あのような仕組みを社会として導入することができれば、全体として選択肢は増える、チャレンジする自由も増すとは思う。チャレンジすることができるのは、やはり最後のセーフティネットがあるからということがある。最後のセーフティネットという意味でのベーシックインカムみたいな仕組みがあることが望ましい、そうあってほしい、ということが込みなのであれば、このストーリーは成り立つとも考えられる。心意気のような話にはなるが。

## ○委員

この前、京大の諸富先生から話を伺った際は、諸富先生はベーシックインカムに代わるものとして、社会的投資という軸を設定してはどうかという提案があった。そういう方向に舵を切ることができれば、こうした議論も可能になってくるだろう。

## ○委員

収入が少なくてもと言うかどうかは別として、チャレンジできるインフラとしての社会保障がしっかりあると、それがどういう形になるかは予想が難しいが、そうしたインフラを整えるという意気込みを示して、皆さんにチャレンジしてもらおうという言い方ならあるかなと思う。

## ○委員

2050年の話なので、ある意味でぎょっとするような表現があってもよい。次の長期ビジョンをどうするか議論をこれからするという意味でも、きれいに丸まってしまったものをたたき台ですと言われても、叩きようのないものでは面白い議論にならないので、ちょっとぎょっとすることがあってもよいのではないか。そういう目でこの試案を見るべきで、そういう役割を果たす試案をあえて示すということは、これまで行政、兵庫県があまりやってこなかったこと。それを今回やろうとしている位置づけでよいのではないか。

## ○委員

今、県の助成金で県下の子育て中のお母さん方のヒアリングをしているが、県の話は皆さんピンとこない感じだ。区の話、市の話なら、こういう行政サービスを使って云々という話になる。県となると、人口が偏在していたり、兵庫県自体が広がったりということもあって、皆さんが、県が自分たちの暮らしと直接どういう関わりがあるのかがイメージできていない。そこで思うのは、県としてのビジョンを、そもそもなぜ県単位に考える必要があるのか、というところの記述がもう少しあってよいのではないか。

例えば自分らしさを生かすや、集中から分散へという話なら、以前にも議論があったが、大阪に行くのではなく、兵庫県に止まってほしいということをどういう理屈で担保できるのかというところがやはり弱いと感じる。単に県がやっているということを超えて、兵庫県というところにこういう魅力があって、今住んでいる人たちが県の中でいろんな活動をしていくことでこのように暮らしが良くなっていくのだ、というメッセージが明確にあった方が、県単位で考えるということに関しての興味を持ちやすいのかなと思った。

先ほどから議論になっている収入がなくても暮らしやすいというところでも、じゃあ行政は何もしないということですかと受け止められてしまうかもしれないし、例えば家族のところでも、多様化してシェアハウスで住むようになる、三世代同居が増えると言ってしまうと、保育園がないだの何だので、行政が散々積み上げてきた話がどう組み込まれているのかが見えてこない。県という視点から考えていくことの意味や、良さ、強さがもう少し全体的に入ることで、この内容をポジティブに受け止めやすくなるのではと感じた。

## ○委員

確かにご指摘のとおりだと思うが、兵庫県という単位での議論は、県としてはなかなかつらいところだ。ありとあらゆる地域が凝縮されているので。

## ○守本局長

県単位という意味では、例えば、最初の個性の追求というところで、誰もが自分らしさを追求とあるが、これはいろいろな選択肢があるということをベースにして言っている。それぞれの地域の個性があって、いろいろなライフスタイルの選択肢がある。だから自分らしさを追求できると言っている。これは県単位でいろいろな地域を抱えているからこそ言えること。その他にも例えば未来シナリオ5など、そういうことをできるだけ盛り込もうとしているが、それがまだ弱いという指摘は、もっともかと思う。

兵庫県だからという部分もまだ弱い。大阪でも、京都でも、岡山でもなく、兵庫県だけ

らこれができるというシナリオがまだ少し弱いという気はしている。今はどちらかという  
と一般的な、ある意味全国どこでも通用するようなことが並んでいると言われれば並んで  
いる。兵庫県らしさというものをもう少し加えていかないといけない。試案の段階でどこ  
までできるかというのはあるが。そういう課題認識は持っている。

### ○委員

まったく書いていないわけではなくて、未来シナリオ 29、30 はやはり兵庫県ならではの  
話だと思う。未来シナリオ同士の関連がもう少しわかる形にならないか。現状だとシナリ  
オが独立して並んでいるように見える。自然が豊かということが子育てや教育にこうい  
うふうに関係してくるのだな、というところがもっと明確に出せるとよいと思う。

### ○委員

未来シナリオが地域によって違うということに対応して、新ビジョンの方向性も 6 つの  
軸が立てられているが、これもおそらく地域によって違う。未来シナリオと方向性が地域  
によって対応するものが違うということがうまく見せられたら、地域の人たちは、自分の  
地域はこういう未来に向かっていく、しかも、県は全体のビジョンの方向性としてこうい  
うものを持っている、ということがわかるようになるだろう。

例えば但馬の人が兵庫県といわれてもなかなかイメージしにくいところがある。人口重  
心からいくとおそらく神戸なので、神戸の話かというイメージを持たれかねない。

兵庫県の平均の議論としてこれがあるというのは皆さん理解するだろうけど、やはりそ  
れぞれの地域の構図みたいなものがあるとよい気がする。

ここまで書いていいのかどうか分からないが、例えば但馬だと今、観光とか、新しい大  
学ができるという話がある。この中で言うと美の創生といった部分に大きな方向性がある  
ということを示す。そういうことになってくると地域に人たちも、県はこの地域のビジョ  
ンの方向をこう考えているのかと、そこから地域の人たちが議論をスタートして修正したり、  
生かしたりということにこの試案は使われることになるのだと考えている。基本的に  
全県の議論で使われるものだろうとは思いますが、兵庫県の個性を考えると、それぞれの地域  
でどう使われるかの視点も加えられたらよい。

### ○委員

兵庫県らしさという視点では、美の創生などの部分がかかり関わってくると思う。前回  
も申し上げ、あまり時間がなかったので、十分に議論が展開できなかったが、美という用  
語が柱になっていて大きな位置づけになっているが、その用語はいかがか。2050 年の将来  
構想の研究会として、こういう将来を目指したいというワードであるならば、私自身、景  
観づくり、まちづくり、環境づくり、あるいはそれらを教育普及していく立場としては、  
それが「美」であるという認識は持ちづらい。

具体的には、語彙力が乏しいのでうまく言えないが、「豊かさ」みたいなことなのでは  
ないか。例えば、美意識と言われても、私には、一体どういったことを言っているのか  
がわからない。文科省でも「美しい」感性というよりは、「豊かな」心を育むということが  
求められている。善悪の言葉ではなくて、美しくないダメなのか、ということではなく

て、豊かであるということが求められるのではないか。「美観」という言葉も、ほとんど国の景観行政では使わなくなってきた言葉である。

今の時代は生活景観であるとか、そういったものが表在化する、暮らしの景観がどんどん表在化していくことを大事にする。ハードの美しさというのは一昔前の話になってきている。例えば但馬の、自分たちは田舎で暮らしているという人間が、美観とか美意識とか言われたときに、それが説得力になるかという、そうではないような気がする。例えば地域の固有性、多様性というのは、もちろんハード整備として、技術とか利便性とか長寿命化とかエコロジーとか、そういったことは当然進めていかないといけないが、それプラスアルファのその地域のらしさは、そこに住む方々、県民、事業者が主導になって、行政はそれをどんどん推進してバックアップして、デザインコードも最初からありきではなくて、そういった方々がどんどんいろんな彩りを地域に与えていった結果、それがデザインコードにもつながっていく、という発想だと思う。

例えば、ちょっと矮小化した話だが、密集市街地で緑の少ない中で、道路にはみ出しても発泡スチロールで花を作ったりだとかしている景観がある。それは端から見ると、美観ではないし、美しいとは言えないかもしれないけれども、そういう暮らしの豊かさが、表現されている景観というのが、多分その地域のらしさだと思う。そういった表現なのかなと思う。

豊かな自然については、おっしゃるとおり、瀬戸内海でも美しい海ではなくて豊かな海であること。少し緑があった海の方が豊かだというようなこともある。芸術文化にしても、豊かな感性に基づいて、その自己表現としての芸術文化であり、またそれを楽しむのも豊かな暮らしにつながっていくものなのではないか。

美という言葉が今まで、将来構想研究会でもまったく出ていないが、どういったところから出ているのか。参考資料で見た目が大事と書いているが、見た目ではなく内面が大事な社会になるのではないかと。散々そういう議論をしてきたはず。兵庫らしい美に代わるキーワードを議論できると今の話にもつながる。

## ○委員

美という極めて多様で、価値観を伴う言葉を計画の中に組み込んだ例はあるのか。

## ○金澤副知事

元々貝原知事が美しい兵庫づくりと言っていた。我々にとってはあまり「美」という文字を使うことには抵抗感がない。ここで言っている美は、かなり精神的なもの。単なる見た目のきれいさとは違う意味で使っている。試案で書いていることも、意味合いとしてはそういう意識で書かれていると私は感じる。

## ○委員

美しい兵庫ということもずっと言われてきたが、でもそうではないよという議論を研究会ではしてきたのではないか。「美」ということは自分で評価できない。「豊かさ」は、先ほどの自由な暮らし方などもそうだが、自分で評価できる、自分で決定できる。そういう生き方を自己決定できる。県として旗印となる用語が「美」というワードになるのは、

すごくシンボリックであるかもしれないが、それが県民に届く言葉なのかということについては、多様な子どもたちを扱っている職場の人間からすると、これを旗印に教育普及はちょっとできないなと思う。

#### ○金澤副知事

私自身の感性だが、ここで言う「美」は、豊かかどうかとは意味が違っている。豊かというのはいろいろな選択肢があって、客観的に豊富だというニュアンスだと思う。ここで「美」という言葉で強調しようとしているのは、一人ひとりの価値を大事にする、ということ強調しようとしていると受け止めている。

見た目だけの話ではなくて、見た目を作ることに対して、皆が気持ちを込めてやる。そういう県土を作りましょうということだろう。芸術文化もそうだし、県土づくり、まちづくりもそうだし、そういうものを「美しい」と表現したいという気持ちを私としては感じている。ただ、それが伝わるかどうかはおっしゃるとおり問題ではある。

#### ○委員

先ほどの景観の話で、発砲スチロールで作られているものが、公共性とか、そういったことに対しての意識という、まさに美しいかどうか分からないが、社会とか公共性を意識したような、自分たちが共同体の1人であって、それが表在化しているという状況であるというのは、まさにおっしゃるとおり。それが日本語の難しいところ。もし他の委員で、よい日本語があればぜひご意見をいただきたい。

#### ○委員

「美意識」と聞くと、大抵の人が見た目を連想してしまう。もちろん内面的、本質的ものを指しているということも、説明を受けると理解できるが、ぱっと「美の創生」を見たときに「見た目の美しさをつくらなければならないのか」といった誤解を招きやすいのではないか。それで言うと「豊かさ」「誇り」であったり、自分の地域に「愛着」を感じたり、他を「リスペクト」したりというようなニュアンスになるのか。やはり一般の不特定多数の方がご覧になるので、「美意識」というような一人歩きしてしまいそうな表現を使うときには注意が必要である。

#### ○委員

おそらく「高まる美意識」「際立つ美観」に関しては、副知事の言った趣旨に対して、表層的な表現になっていると感じる。おそらく「美」を用いたのは「価値」という意味で使っているのではないか。「真善美」の美、つまり、良いか悪いかや、正しいかどうかではなく、感性そのものであって、別にそれは誰かが評価するものでもなく、それぞれの人が大事に思って美しいなって思うようなものだと思う。それが伝わるように表現すれば良いのではないかと思う。例えば「真善美」という言葉は普遍的価値だとも言われているのである。そうした補足ができれば誤解を少なくできるのではないか。

#### ○守本局長



「美意識」の表現は検討する。確かに心の部分、思いやりだとか、伝統文化を大切にするとか、自然と調和するだとか、そういった行動や心の部分をここでは描きたいと思っているので改めて考えたい。ただ、見た目の景色の美しさという部分は、確かにこの研究会での議論はなかったが、県民との意見交換会の中では結構出てくる。まちの美しさや、田舎でも美しい田園風景を残したいという意見は多い。ご批判はあるかもしれないが、崩れていく美観ではなく、美しい美観を残したいということは書きたい。人が集まる条件としての「美しさ」と「文化」ということは、割といろんなところで言われている。美観という言葉が良いか悪いかは別として「見た目の美しさを追求する」ということは書いて良いようにも思うが。

#### ○金澤副知事

私も県民との意見交換会で同じ発言を聞いているが、私の受け止めは、見た目の美しさそのものというよりは、これは自分たちが受け継いできた宝であって守り育てなきゃいけないという思いのところを感じるし、それこそ大事だという気はしている。だから、伝統的建造物にしても、里山や棚田にしても、それを表現するとすれば、それを守る人、住んでいる人の活動というニュアンスが強く出た方が良いのではないかという気がしている。

#### ○委員

であれば、景観が専門の私としては「美観」という言葉は、どうしても倉敷美観地区のような、ハード整備がなされたような行政がつくったまちのようなイメージを感じるので、やはり、思いの部分が表れる「風景」とか、そういう用語に変えた方がより良いと思う。

#### ○金澤副知事

例えば「美しい風景」だと、イメージに近くなるのか。「美しい」自体がダメなのであれば、かなり根が深い問題になるが。

#### ○委員

例えば、シナリオ 28「際立つ美観」の中で「美しい」という言葉を使ってもあまり問題はない。総体として「美観」を県で創生していくと言うと誤解が生じるので、そこは改めるべきだ。「多様な価値観」や「豊かさ」の方が兵庫県らしいのではないか。

#### ○委員

若干ずれるかもしれないが、今の議論で「美しさ」が「価値」だとかいろんな意味を含むという話を聞くと、やはり、それぞれのシナリオが微妙にリンクしていることに思い至る。つまり「美しさ」を捉えていくときには、例えば「学びというものの豊かさ」は、美しさを捉える感性にも当然リンクするだろうし、あるいは、コミュニティのようなものにもつながってくるだろう。

今回は、シナリオという形である種、列挙する形になっている。事務局からもオーバーラップはあるとの説明はあったが、それだけじゃなくて、もう少し因果とか、リンクがあるだろうと感じた。それを全部やるのは大変だが、やはりビジョンを描くときには、どこ

とどこのシナリオがリンクしているという相互関係が見えるような提示の仕方であってもよいのではないか。例えば企業で経営戦略を立てていくときに2つのやり方がある、1つは、いろんなシナリオを列挙していくやり方。例えば「①ICTを推進していく、②働きやすさを改善していく」、これが列挙だが、最近は企業でもそれだけだとお題目になってしまうという議論があって、むしろ、それぞれのリンクを示していく。例えば「ICT化を進めるから、働き方がこうなって・・・」という、それぞれのリンクで1つのピクチャーをつくっていく。シナリオというのは、元々の意味はそういうものだと思う。そのような提案の仕方であってもよい。

## ○委員

美しさについて引っかかっている部分としては、「美しい」とか「伝統的」といういわゆる一般的・伝統的な価値観の部分と、「多様な価値観」「性の多様性を認める」というような新しい価値観の部分で、普通の人が見る時にそれが少しずれるような感じがする。それは伝え方の問題でよく起こること。その両方が両立しうるような形で、美しさや伝統のようなものを説明していくことが必要ではないか。そもそも兵庫県というのはすごく「多様な価値観を持っていることが伝統である」とか。そういうふうに「美しさや伝統と多様性で、保守的な価値観を打ち壊していく」というような、両立しうるような書き方をすると「精神的な美しさ」に違和感を覚える人にも納得できる表現になるのではないかな。

## ○委員

それでは「美しさ」の議論はここまでにする。

## ○委員

ちょっと今の話にも関係しているが、全般的にシナリオで書いている言葉が若干ミスリードしてしまうところが多いのかなと思う。一番上に書いている高まる美意識とか際立つ美観というリード文の一つ下の文章を見るとそんなに違和感がないが、最初のリード文のところには若干違和感がある表現が散見される。

私の関連するところでいうと、稼ぐ地域コミュニティ。これは抜本的に修正してほしいのだが、もう一つの経済、連帯経済というか、コミュニティ経済をちゃんとやろうということで、その中で稼ぐということもちゃんとやらないと成り立たないということだ。要は地域の課題を解決するためにお金はちゃんと回しましょうということなのに、稼ぐ地域コミュニティと書かれてしまうと、自治会などがちゃんと儲けないといけないじゃないかというイメージになってしまいそうで、趣旨が違ってきたりするのではないかな。

強まる地域自治も、そうだ。これだけを見ると、昭和の自治がすごく強まっていくようなイメージがあって、余計住みにくくなるようなイメージを受け取ってしまう。もうちょっといい言葉がないか。こうすればということも言い辛いのだが。

シナリオ8、9もそうだ。「家族」と言われるが、それは「家族」でよいのか。もう少し個人で生きている人たちを大事にしていく議論もしていたと思うのだが、それも含めて大家族と言ってしまったときに、家族という言葉が昔の家族のイメージで受け取られるのではないかな。楽しむ子育てでもそうだ。そういうことが全般的に気になる。

進化する御食国も、ここが多分農業になるのだろうが、農業のことが全く触れられていないのが気になる。もう少し一番上のレベルの言葉を再検討されてもよいのではないか。一つ下の階層の記述はそんなに違和感がないが、最初に目に入る部分なので気になる。

26 頁の新ビジョンの方向性で書いているところも、それぞれの方向性の下に書いてあることが結構偏っている気がする。例えば開放性の徹底は、すごく外国に対して開放するようなイメージをここだけを読むとを感じる。開放性だと、心とかいろんなものの開放性があるような気もするのに、外国に対して開放するようなイメージが強い。集中から分散も、例えば地方内での分散もあるだろう。分散にはもっと広い意味があるはずだが、ここだけを読むと、都市対地方みたいな構図に見えてしまう。メインとなる、一番上に上がってくる部分の記載をもう少し検討してもよいのではないか。

前から言っていることだが、残されている人たちがいっぱいいる中で、なんとなく「強い」人向けの内容になっている。それがいろんなところに散見されて、どこということではないが、全体のトーンとしてそう感じてしまう。例えば34頁「あふれる学びの場」で専門性を高めることができるということが書かれているが、現実問題としてはいろんなレベルの人がいて、いろんな学びができないといけないのだが、専門性を高める職業人を生み出していくような世界の話だけに見えてしまうところとか。食べ物の問題も、貧困がやはりたくさん存在しているのだが、その辺りに対して、どこということではないが、もう少し配慮が必要ではないか。我々はそもそもそういうことにすごい鈍感な立場にいるんだと思うので。だから、そうでない人たちがいっぱいいることを意識的にしておかないと、文脈がエリート教育的な、強い人の文脈になりがちなのがあると思う。

67 頁の「カーボンニュートラル」は、もう少しエネルギー全般の話にならないか。これは美の話とも関わるのだが、「自然」や「環境」についての記述がもっと前の方に出てきてもよいのではないか気がする。農業も「農場」と書かれているが、細かいことを言うと、もっと環境保全型の農業、環境に配慮した農業を目指すといった強いメッセージを出すことも考えられる。自然や環境に対する意識がすごく下の方に書かれている気がする。

## ○委員

全体としての印象は、一番先端的に変化しているところを整理されていて、背後にどうか、普通にいる人たちについてはあまり書かれていない。表現の仕方について全県民に対してこれを提示しよう、ベースにしようという視点からいうと、少し気をつけたほうがよい気がする。一番面白いのは先端で変化しているところで、そこに関心が行きがちなのは、それはそれでよいのだが、やはり記述のあり方としては、SDGsではないが誰も残さないという視点がベースにないと、やはりまずいのかなと思う。

## ○委員

39 頁の「拡張する家族」と 40 頁の「楽しむ子育て」は、私も同じような感想を持っていて、やはり家族の将来ということを考えてときに一番重い課題は、いわゆる 8050 問題だ。結婚もしていない、子どももいなくて、今までは親の年金などで暮らしていた単身者が放り出されていくと。その人たちをどう包摂するかが結構大きな課題だと思う。家族のことを考えるのであれば、その辺りも目配せしているということであつたほうがよい。

「楽しむ子育て」がある上に「拡張する家族」も現状では結局子育ての話になっているので、バランスの悪さを感じる。家族ということで打ち出していくのであれば、暮らし方とかそういうところも入れていったほうが、誤解がより少ないのではないかと思う。

加えて、多様化するということと、大家族になる、要はシェアハウスのものが増えて地域が担うということと、三世代近居、同居が増えるというのは、まったく違う方向性の話を、あたかも同じ現象であるかのごとく書いているというのも、理解しにくい面がある。盛り込みすぎて逆にわかりにくくなっているところがあるのではないか。入れたい話は概ね理解はできるが、少し整理して軸を出した方がよいと思う。

40 頁の「楽しむ子育て」は、これはワークライフバランスの話にした方がよいと思う。女性は子育てと社会での活躍を無理なく両立できるというのは、前にも言ったが、現時点でできていないとおかしい話だ。それがなぜこんな長期ビジョンの中に、将来できるといいですねみたいに入ってくるのか。ここは男性も女性も関係なく、年齢も関係なく、すべての人たちがワークライフバランス、仕事と家庭、プライベートの調和が取れた中で、子育てに関しても暮らしに関しても、自分らしさを持って生きているんだという話なのではないかということを確認していただきたい。それでもやはり現実的なところでは、こうなるということであれば、それは最終的な判断だとは思うが、一応言っておく。

#### ○金澤副知事

39 頁で気になったのが共同保育、共同介護の概念だ。たぶん共同でこういうことに取り組むにはなんらかの絆、紐帯が必要だ。昔はそれが血縁だった。これから血縁が成り立たないから共同になるのだが、ではそのつなぎをする紐帯は地域なのか。でも地域は出入りがある。自分のライフステージごとに引越す、移動の自由度が高まるということを全体の前提としているので、地域の中で絆を作りましょうということが共同保育、共同介護のベースではない気がする。でもそうするとそれは何なのか。同じ立場にあって、同じ関心、同じ問題意識を持っている人が集まるというのは、それはそれであると思うが、少し狭い気がする。血縁を超えたというのはよいのだが、血縁を超えて共同保育、共同介護にみんなが取り組むつながりの根源は何なのかというのが、自分でも腑に落ちないところがある。これは記述の問題というよりも、研究会で議論された中身の話だろうが。

#### ○委員

シェアハウスでのこういう状況というのは、萌芽的に都市部などでは出てきているということだが。

#### ○委員

実際に今やっている人たちがいる。兵庫県下、神戸市内でも、若い人たちが、そういう形でコミュニティを作るということを実際やっている。なので、ここはそんなに絵に描いた餅だとは私は思わない。

#### ○金澤副知事

シェアハウスはいいと思う。まさに当事者同士なので。当事者が集まって自分のために

やる。だが、共同介護、共同保育は、共同介護だったら介護する側、される側がお互いに自分の親だけではなくて、みんなで手に手を取り合って共同でやろうと。昔の人類がどういう生活をしていたかわからないが、グループで生存していたころのスタイルだ。それはそれで血縁社会だったらありうると思うのだが、今、私が介護する親がいます、こちらにもいます、共同でやりましょうというときに、そのつながりは何によって永続するのかという点がわからない。

#### ○委員

ご執筆の方に答えていただいたらと思うが。

#### ○木南課長

共同保育の延長線上でそういう姿もあるのではないかという認識で書いている。以前の研究会資料の中で取り上げたシェア金沢という事例がある。あのような共同居住区みたいなものが、民間ベースでどんどん広がっていくような未来もあるのではないか。そこでは共同保育も行われつつ、共同介護も行われる。多世代があるエリアの中にかたまり住んで、本当のコミュニティを形成している。そうしたつながりの中で弱い部分を補っていくような暮らし方があるのではないかという問題意識でここは書いている。

#### ○金澤副知事

拡張版のシェアハウスということか。当事者だけでなく、子どもと親の複数世帯がある空間をシェアして暮らす。そういう場がもし整えられたら、その方が好きだという人もいるのではないかということなら確かにあり得るかもしれない。

#### ○守本局長

共同保育と大家族は方向性が違うのではないか、という話だが、これをあえて2つ並べたのは、元々大家族だったのが、戦後核家族化してきて、両親だけで子育てをしている。そうした小さい単位になったものに対して、もう少し支え手が広がるような未来ということで、共同保育と三世代近居をつなげた面がある。そんなにおかしいとは感じていなかったが。

#### ○委員

議論が出るのは、尖っているからなので、よいことだと思う。尖ったままいくというのであれば、それも有りだ。今回の兵庫県のアプローチとして。

#### ○委員

議論を元に戻すわけではないが、32頁の「誰もが自分らしさを追求」と54頁の「自由になる働き方」のどちらで言うべきこと悩むのだが、AIの話だ。AI＝全体的な技術革新と捉えたときに、人に替わってAIが仕事をやる、それはもちろんあると思うが、そうではなく、今まで社会保障の対象になっていた人や、コミュニケーションが取れず仕事ができなかった人でも社会参画できる、そのサポート、支援のためのAIというものもあるはずだ。AI

が人にとって代わることもあるが、AIと人間が代替関係ではなく、AIが人の能力を補完し、プラスアルファして、よりできるようにするというのもAIの役割だと思う。

その意味では「自由になる働き方」に書くべきか分からないが、32 頁の話だけだと「強いものが勝つ」ということだけに見えてしまう。創造性や個性がないと生き残れませんよと見えてしまうが、そうではなく、AIを味方につけて、今まで社会参画できなかった人でも自由に働くことができるようになるということが必ずあるはずだし、今でもそういうことがあるので、そういう部分をもっと発展していく、技術の進化につれてそういう人たちが労働者の一人として入ってくるということが重要ではないか。そこをもう少し強調してもよいのでは。AIは敵ではなく、共存することによって働き方が豊かになるというところまで書いてもらえたらと思う。

50 頁はユニバーサル社会づくりということで基本的には身体障害者をターゲットに話をされているが、このグラフの左側を見ると身障者が増えているように思うが、実はこれは高齢者の身障者が増えているだけで、64 歳以下では減っている。今増えているのは精神障害者。今そういう人たちが労働力としてエントリーできなくて、例えば引きこもりになってしまうという現状がある。その意味ではユニバーサル社会をどう捉えるかにもよるが、今までのユニバーサルな社会、つまり段差がないユニバーサルなデザインというものだけではなくて、「見えない障害」と言っているが、「見えない障害」の人たちにとってもユニバーサルということを入ることが重要だ。ユニバーサルはどうしても身体障害者の話に行ってしまうが、実はそうではない人たちの方が増えていて、この人たちのケアという意味でもユニバーサルな社会を作らねばならないという視点を加えてほしい。

## ○委員

大変重要な指摘だ。身体障害よりは、精神障害の問題の方が大きいと。内向きになっていくと、鬱症状になっていくが、それが外に出ると犯罪になりやすい。鬱や、そうした状態に起因する犯罪が増えている背景に、精神障害の問題があるということだ。

## ○委員

障害者の仕事の選択肢が減ってきている。今までのように「単純作業ならできる」という人たちの働く場が機械化によって次々なくなっている。今求められる能力は、コミュニケーション能力だったり、クリエイティブなものを作ったりとか、選択肢としてそういうものしか残ってなくて、その能力がなければドロップアウトしてしまって、そういう人たちはどうなるかという、働く場所がなくなるので引きこもってしまうなど、精神的にしんどくなっている状況だ。AI、デジタルと言っている間に、取り残される人たちがすごく増えているのに、みんなその人たちのことを考えていない。「AIが席卷するから違う能力を高めなさい」と言ったところで、そうできない人はどうするのか。そうできない人をどうするのかを考える時代になってきている。その中で、AIは単に代替ではなく補完的な役割を果たし、それを使って社会参画することで犯罪の抑制や悶々とした状況がなくなる社会になるという方向性を示すべきだ。

## ○委員

事務局でよく検討してほしい。

#### ○委員

先ほどの「稼ぐコミュニティ」だが、地域の中で支え合うコミュニティや経済をもっと標榜してもよいのではないか。クリエイティブなものばかりではない、いろんな仕事があって、そういうもので地域の中で支え合っているような。どうしても消費者側に目が行くが、生産者も地域の人たちだから、いろんな仕事ができる社会であってほしいと思う。

#### ○委員

皆さんがおっしゃっていることはもつともで、県が打ち出す未来のビジョンなので、あまり強すぎるのはどうかと思う。長期ビジョンなので、力強いメッセージで引っ張っていきたいという意味もあるのだろうが、できない人たちのケアをどうするのかといったことも考えた文言にしないといけない。

#### ○委員

残り 20 分なので、最後に皆さんから一言ずつ厳しいお言葉を。

#### ○委員

大きなビジョンを示すとき、暮らしが便利になる、テクノロジーが進化するといったことは合意が取りやすい。問題は価値観や文化などの部分。変化に対応できない人もいるだろうし、しんどいと思う人もいるだろうから、そこをつなぐ仕掛けがいる。テクノロジーが発達して便利になることについては、人々は何の抵抗もなく受け入れられるだろう。しかし価値観の部分となると、抵抗する県民も多いと思う。そこをうまく説得していくロジックというのは、ほぼ教育だと思うが、そこを分けて考える必要があると思った。

#### ○委員

最近、社会福祉協議会の方から聞いた話で印象的だったのは、「コロナがあって状況が抜本的に変わった今、心配なのはコロナが終わった後のこと。変わらないといけないと思っている人はあんまり心配していないが、元の生活に戻れると信じている人が心配だ」という話だ。結局、人間というのは突然、はい変化してくださいと言われても、なかなかそれについて行けない人が多い。変わらなければいけないと言われて、すぐに変わるものでも、変わるものでもない。今回、試案という形で将来のシナリオを提示されたが、ここまで人間がついて行けるか。抜本的な変化が起きていく中で、その変化にどのようにソフトランディングさせていくかということも考えていかないといけない。その意味では、最後の結びのところで、試案はたたき台として作成されたものだと書いてある部分を、もっと強調した方がよいと思っている。引き続き県民の声を聞きながら、兵庫が目指す将来像を描き出していくことが大切、というところ。要は、プロセスもわからないままに、はいこんなふうに変化しますよと言われてもなかなか受け入れがたく、ついて行けないところがある。将来を見据えるだけでなく、「そこまでのプロセスを一緒に考えていく」ということを試案の中でもきちんと示すべき。突然これを与えられて、「はい、こうなります」

というよりも「プロセスは一緒に行きましょう」といった声かけが重要ではないかを感じる。

## ○委員

打合せの時に木南課長に何うと、この試案は、今後の審議会や地域での新ビジョン検討の素材として使っていくもの、県民の皆さんに見てもらって議論を引き出していくためのものとのことだった。そのことをもっと強調して、試案はそのため作ったものであり、ビジョン作りも含めてプロセスを大事にしていくということを強調した方がよい。

## ○委員

繰返し議論し、県民の声をどのように反映していくか。先ほど景観の議論の中でも述べたが、未来はこれから県民自身が作り出していくもの。県から「こんな美しい景観があったらいいですね」と言われる、そういう他人事の話ではなく、作る過程の中で、一緒に活躍してくれる、一緒に県を作ってくれる人々をいかにまとめながら、それぞれが目指すシナリオを、この試案のシナリオにないようなことも含めて、作っていけるか。柱に基づいて活動を展開していけるような県民との関係づくりが重要だ。

また、兵庫県の将来展望を強烈に示すという意味では、環境と農業を、もっと上位に位置付ける必要がある。順番の入れ替えなのかもしれないが、検討してほしい。国際的にもSDGsが当たり前になってきており、カーボンニュートラルも、これから目指す話というよりは、それはもう実現していて、その先にどんな社会を作っていくのかということが議論されるべき。

この研究会では教育の話が多くあり、未来シナリオ 33「開かれた学校」で教育の問題、公教育のあり方を示されているが、オンラインやデジタル化は格差をなくすために当たり前でできている前提で、やはりリアルが重要、地域が重要ということを示す、そこが魂だと思う。先ほどのAIの話もそうだが、ICTがツールとして普及していることは当たり前で、その上で根本的に大事なことは何なのかを示す。それが見えやすいことが重要だ。

細かいことだが、地域で作る体験の場の記述はよいのだが、幼児教育の部分は、指導要領みたいなものが作成され、2〜3歳児も縛っていくように読める。そうではなくて、三つ子の魂百までを認識して、いろんな地域にいろんな選択肢があって、様々な体験をさせることができる。そうした可能性を感じられるようになってほしいと思っている。それがまさに美意識のようなものを醸成する教育だと思う。

## ○委員

テクノロジーの話と価値観の話が混在しているところがある。テクノロジーは手段であって、目標とするあるべき姿に対して、それがどのように貢献するのか、あるいは、例えば目標がロケットであれば、もっと技術革新が必要だとか、そういう議論があってもよいと思う。

教育の話、スキルという意味での教育も重要だが、なぜ県でこういう議論をするのかというと、それが一つのコミュニティとして、みんなが共同体意識を持って、そうだよねと思ったらもうそれが根拠になる。もっと広く言えば日本かもしれないし、アジアかもしれ



ないし、世界かもしれないが、それぞれ人がどれぐらい他者のことを自分事として、平田オリザさんが言われるエンパシーで思っていけるか。

戦後のこれまでは、行政がやってくれるということで、市民は放っておいてもよかった。ロールズの格差原理で、要するに最低の人を引き上げるのが社会的な厚生を上げるということで、要は、そういう社会的規範があると、我々は自分が目の前にした本当に困っている人を自分で助けないといけないのかどうかを判断しなくていい。社会でそれを社会的規範として合意し、公共サービスが社会福祉を整えてくれる。最貧国へ行くと、人間として直接助けないといけないという問題に直面する。極端な例だが、これからはむしろ、それを背負っていかないといけないようになるのではないか。なかなか行政もできないところで、自分が共同体の中のコミュニティのメンバーに対して、何かしらできることをしていかないといけないというところの意識を醸成する教育。その意味での教育が重要と思う。そこさえできれば、ここに書いてあるような相互扶助は、個人間でも、地域間でも合意ができる。理想論かもしれないが、それが分断を生まない社会に向けての最低条件ではないかと思うので、その辺を特にしっかりやっていくことが重要と考えている。

#### ○委員

将来を構想するということはどういうことかと考えたとき、若い人にとって魅力的なプランであってほしいということを感じる。30年後の社会を担う今の若い人たちが、なるほどこういう感じになるといいなあというイメージを共有できるかどうかが大変なところ。その上でディテールや、現実はどういうことを積み上げていけばそうなるのかといったことは、まさにこれをたたき台にして話をしていけばいいことである。そういう意味で、打ち出しが強い言葉が並ぶということは必ずしもネガティブなことだけではないと思う。ただ、他方で、そうすることによって伝わりにくくなってしまうとか、頑張る人だけに魅力的に映ってしまったりという点については、もちろんバランスとして気をつけなくてはいけないとは思いますが、やはり若い人たちにとって魅力的であるということが大事だということを最後にお伝えしたい。

#### ○委員

攻めと守り、右と左の中で、結果だけを見るとなんとなく真ん中に収まっているような気がする。それは良くも悪くも兵庫県のあり、それはそれでいいと思う。本当はもっと左側に寄ってみるとか、右側に寄ってみる方が面白いのかもしれないが、県という中ではそれが正當かなと思う。これをそういう位置づけだというように捉えた上で、市町だったり、もっと小さな単位で、尖って攻めていくようなところもあれば、オルタナティブな経済を目指すような地区があったりとかが出てきたらいい。それを地域ビジョンや、もっと小さな単位でどんどんやっていくような、その指針としての位置づけがうまく伝わればよいと思う。県のビジョンは、上位計画みたいなイメージでつい捉えられがちだと思うが、そうではなくて、あくまで真ん中を示したもので、もっと尖って左右散らばってほしいということを伝えられる内容になればよいと思っている。

#### ○委員

例えば「沸き立つ企業」でも、機会が提供されるということと、その裏にはリスクがあってセーフティネットが必要ということがある。要は全ての項目にどうしても両方の側面が入らざるを得ないので、バランスとメッセージ性と、どちらを採るかは難しいだろうと思いつつ聞いていた。ただ、県という行政が出すメッセージなので、ある種の理想的な姿を見せるという意味では、これはこれで仕方がないのではないかと聞いていた。

先ほどの件をもう一度申し上げておくと、メッセージとして出すときに、38 の分岐した別々のシナリオが出ていて、いろいろな未来があるというだけの印象になってしまったらもったいないと思う。企業の戦略やビジョンでも、玉虫色的にいろんなものが並びがちだが、結局このシナリオとこのシナリオはリンクしている、という各パーツのつながりを、最小限でもよいので出せないか。より重層的な示し方がないかということ。社会は基本的にシステムでできているので、一つ変えれば他のところも必ず何か影響を受けるはずだし、それがリアリティだと思うので。そのような文字通りのピクチャーがあった方がよりいいと思う。例えば「あふれる学びの場」、いろんな資本を重層的なコミュニティで提供するというシナリオ、これはこれで大事だが、これは「開かれた学校」のパーツに関係するだろうし、「人に投資する社会」のパーツにも強くリンクするはず。このように各シナリオは相互にリンクしている。そのリンクを全部入れだすととんでもない資料になってしまうと思うが、一つひとつシナリオの間に矢印が引かれるような形で一つのピクチャーとして示すみたいなものがあると、読む人が全体像をイメージしやすくなると思う。

## ○委員

最後に私からも二点。

一点目は46頁の「多文化が入り交じる兵庫」。これから日本が外国人をどう受け入れることができるのかは非常に大きな課題だ。もはや日本は選ばれる国になっていない、むしろ誰も来なくなってしまう危機感の方があがる。冒頭に一人あたりGDPの話も出たが、今後賃金で日本を選ぶという人は明らかにいなくなる。周辺の外国人就労者に聞いても、賃金面では日本に来るメリットはないと明確に言い始めている。就労者にとっては基本的にそこが一番重要なので、これから一人あたりGDPがどんどん下がっていけば、もはや日本には来なくなると考えておいた方がいい。

そのときに日本の労働市場はどうなっていくのか。先ほども触れた里山資本主義の著者は、外国人は来なくてもよいと言っているが、本当にそれでいいのか。おそらく異なる文化を持った人たちが来ないと、いろいろな意味でのイノベーションが起きなくなっていく。もちろん労働力としての力もパワーダウンしていく。この辺りは国の政策にならざるを得ないが、真剣に考えるべき将来像であり、多文化の問題だけでは済まない非常に大きい課題だと思う。

二点目は防災の話だ。南海トラフ地震は確実に起こる。今後30年の間に70~80%の確率で来る。すると、このビジョンが描く期間の間に起こるわけだ。なので、防災に力を入れると言うよりは、南海トラフが起こった後、兵庫県はどのように回復していくのか。回復軌道に乗ることができるのかのビジョンが要るのではないか。V字回復なのか漸進的回復なのかは分からないが、南海トラフの後、どのように2050年の将来像に向かっているのか

のか。防災のシナリオは今がスタートラインのように読めるのだが、現実はより厳しいと言わざるを得ない。災害は南海トラフだけではないが、例えば南海トラフだとすると、内陸部の安全な地域と臨海部の連携をどうするか。兵庫県は兵庫五国というようにまさしくそのような連携が県内で可能だ。現時点から県内での連携関係をより強化していく。そのことによって、人口の少ない地域が、都市部との連携で何らかの刺激を受ける。関係人口とはその辺りも含めての言葉でもあるのだろうが、その辺りのことについて、試案の中でもっと危機感を強調することが大事だと思う。

## ○金澤副知事

本日も実りの多い議論を頂き、感謝。現在進行中の県民とのビジョンを語る会など、県民との対話の中で、この試案をベースに掘り下げていくことになる。

新ビジョンの検討、我々も努力をしているのだが、悩ましい点が二つある。

一つは兵庫らしさ。兵庫ならではのビジョンとは何なのだろうとよく言われる。クレジットを変えただけで他の県でも使えるのではないかという話だ。この試案でも、私なりに見ると兵庫ならではの部分は相当入っていると思う。多様性、選択肢の多さ、それらがあるので高い自由度がある。高い自由度の中で多様な選択肢を許す開放性がある。それを飲み込む包摂性がある。それが誰も取り残さない社会につながっていく。その辺りは兵庫ならではのといえると思う。しかし、なかなかわかりにくい、伝わっていかないという悩ましいさがある。これをどのような言葉でわかりやすく県民の皆さんに訴えかけることができるか。この部分はまだまだで、現時点では、柱がたくさんあって万遍なく網羅しているという印象しか県民には伝わらないだろう。

もう一つは最初にも申し上げた世代の差が結構あること。語る会で話していると、高齢の方はどうしても目先のことが気になる。一方、若い方は自分の将来があるので未来の話が出る。両方ともに参加してもらって、一緒にビジョンを作りましょうという形にするのが実は相当至難の技だと内心感じている。

2050年の将来ビジョンなので、できれば高齢の方には若い方たちのためにという思いを持ってもらって、今日の議論にあったように、これはまさに若い人たちのためのものだと打ち出したい。それが兵庫県のビジョン、魅力をつくるものであり、若い方たち、場合によっては外国の方たちも引きつける。そのようにするためには高齢者の方々が若い方々のためにこれをやっていこうと思ってもらわないといけない。この雰囲気はどうやってつくっていくか。自分たちは関係ないではなく、後輩のためにひと肌脱いでやろうというところへどうやって誘導するかの難しさがある。それを乗り越えないといいビジョンはできないと分かっているので、なんとか乗り越えていきたい。

委員の皆様には、この先も引き続きいろいろお力をお貸しいただきたいと考えている。

(以上)